

日向記に見る文禄・慶長の役

「海を押し渡った侍たち」著者

毛利泰之

目次

はじめに

一 名護屋城

二 文祿の役 (壬辰倭乱)
イムジンクヱラン

三 慶長の役 (丁酉倭乱)
チヨンユクウヱラン

四 日本の軍勢が朝鮮から略奪し持ち帰ったもの

まとめ

はじめに

南九州文化に「文禄・慶長の役・海を押し渡った侍たち」を十一回にわたって連載しました。

この小説を書くきっかけになったのは、二度の韓国旅行と名護屋城訪問でした。

「いまから四百年前に太閤秀吉による朝鮮出兵が行われました。この日韓両国にとつてのこの不幸な出来事は、特に韓国にとつてはいまだに忘れることのできない傷あととして記録されています」(太閤と名護屋城発刊にあたって・鎮西町長吉田健三氏)。

私が韓国に旅行したのは二度です。

最初は一九九八年五月のソウル・扶餘・公州などを訪問し、宮崎県美郷町神門に伝わる「百済王伝説」を、ラジオドラマにするための取材旅行でした。

この時、公州近くの麻谷寺で、「豊臣秀吉の朝鮮半島への侵略で、麻谷寺も甚大な被害を蒙りました。宝物殿から貴重な仏具が持ち去られました」との黒御影石に日本語で刻まれている案内文を見つけました。正直、こんな辺鄙な山奥まで日本の軍勢が押し寄せたのかと驚かされました。

二度目の韓国訪問は、二〇〇二年十月の「文禄・慶長の役の戦跡を訪ねる旅」で、釜山・蔚山・慶州・大邱・晋州・泗川・統宮と駆け足で巡りました。

この旅では倭城(日本の軍勢が築いた城)の釜山城、西生浦城、泗州城に足を運びました。

西生浦城は一部に林野が見られるものの、維持管理が行き届いていて、遺構の状況は良好で、中心区域の石垣は見事でした。石垣は自然の野面石、自然の割石が使われていました。この城の北三十キロに蔚山城があり、この蔚山城ができる前までは西生浦城が最北の倭城であったとの説明を受けました。

倭城は朝鮮半島南部に三十が確認されています。

私は日本と朝鮮との二〇〇〇年にも及ぶ交流は友好的であったと思います。しかし豊臣秀吉の朝鮮への侵略が、攻め寄せた日本の軍勢と朝鮮半島の人々に対して大きな不幸をもたらしたとの観点から本稿に取り組みました。

一 名護屋城

「日向記巻第十一に、高麗御渡海并働事」に「天正十九年太閤秀吉公朝鮮国御退治有ヘキ旨思食立、九州ノ大小名ニ命シテ城ヲ築カル、是ニ依テ当家ヨリモ人夫ヲ出シ玉ヒテ、……」

このことから、名護屋城築城のために安井相右衛門秀朝が人夫らを率いて手伝ったことが分かる。

名護屋城は天正十九年十月に作りはじめ、翌文禄元年四月には完成したものと考えられている。

この名護屋城本丸には五層七重の天守閣が聳え、金箔を張った瓦が太陽の光をあびて輝き、二の丸、三の丸、山里丸があり、総面積は十四万平方メートルあったとされている。

しかし、出兵用の基地ということから、石垣、天主、櫓などの施設は整えていたものの、防衛上は不備で、むしろ権威を誇ることを主眼としていたようである。

豊臣秀吉は、文禄元年三月までに、全国の大名は名護屋に集結することを命じた。軍役は、九州の大名が高百石について五人、四国・中国が四人、以下九州から遠くなるほど少しずつ軽減された。

日向記に、

「カクテ祐兵主ハ朝鮮渡海ノ支度調シカバ出陣ベキトテ、一族ニ伊東義賢、祐勝、川崎権助、大内孫兵衛、……鉄炮五十挺、旗二十本内吹貫二本、弓二十針、長柄三十本、雑兵共二百三十人引率シ……、三月朔日、飢肥ヲ祐兵主御出馬アリテ清武ニ到着。財部、

三田井、高森、山鹿ヲヘテ、三月十五日二名護屋御着陣、御逗留」とある。

なお、日向纂記には

「公（祐兵）ノ乗船ハ油津ヨリ下ノ関ヲ漕廻シ、三月二十日奈古耶二着リ」とある。

伊東祐兵の石高は二万八〇〇〇石であったので、引き連れた七百三十人は、軍役の高百石あたり五人というのに当てはめると、割り当てより少ないことが見てとれる。

出陣した者の名前を日向記から拾ってみても一門、侍衆から道具持ちまで含めても七十人余りしか拾えない。

また、日向纂記によると宗徒の人十五名、小姓五人、小指衆十人、徒士十人、外座間五人、道具持などと記されている。

豊臣秀吉の三月一日出発は、眼病を患ったため、京都出発がほぼ一ヶ月ずれ込み、名護屋への到着は四月二十五日となった。

この名護屋城を囲むように全国から動員された諸大名百二十家・二十万余の軍勢が陣所を構えた。

陣所跡の保存整備事業により、百十九ヶ所、上杉景勝、加藤清正、前田利家、小西行長、徳川家康らの陣屋跡は特定されているが、伊東祐兵、豊前（延岡）高橋元種、財部（高鍋）秋月種長ら日向の諸將の陣所は特定されていない。

名護屋城博物館の学芸員は、

「十萬石以下の大名で、先陣を命じられた大名は陣所を築かずに連絡所を置いて渡海したようです」と説明してくれた。

文禄の役で同じ四番隊に所属した毛利吉成（豊前小倉）は魚見崎、島津義弘は波戸岬に陣所が確認されている。

二 文禄の役（壬辰倭乱・イムジンウエラン）

（文禄1、2年 / 1592、93年）

渡海部隊の編成

一番隊が小西行長ら肥前・肥後の一万八七〇〇、

二番隊加藤清正ら肥後の二万二八〇〇、

三番隊黒田長政ら豊前・豊後の一万一〇〇〇、

四番隊毛利吉成、島津義弘、伊東祐兵（七百三十人）、高橋元種（七百四十一人）、秋月種長（三百八十八人）、島津豊久

（四百七十六人）の一万四〇〇〇、

五番隊福島正則ら四国勢の二万五〇〇〇、

六番隊小早川隆景ら筑前・筑後の一万五七〇〇、

七番隊毛利輝元の三万、

八番隊宇喜多秀家の一万、

九番隊羽柴秀勝、細川忠興の一万一五〇〇、

合計十五万八八〇〇、

これに名護屋本営の後詰めを合わせると三十五万五三〇〇となる。

破竹の勢いの日本の軍勢

文禄元年四月十二日、小西行長の率いる一番隊が釜山浦（港）に上陸し、釜山城主鄭撥に「仮途入明」（朝鮮に道を借りて明に侵入するという意味）を要求したが拒否される。

ここに、七年間にもわたる「文禄慶長の役・壬辰倭乱」の火蓋が切られたのである。

翌、十三日東萊城に迫り、「仮途入明」を要求するも、城主宋象賢から「死するのは易し、されど道を通すは難し」と拒否される。

二番隊加藤清正らは四月十七日釜山に、三番隊黒田長政らも竹島に上陸する。